世界文学全集

1

ホメーロス

イーリアス
オデュッセイア

呉茂一訳

河出書房

カラー版　世界文学全集　第1巻

ホメーロス　イーリアス　オデュッセイア

昭和 44 年 6 月 25 日初版印刷
昭和 44 年 6 月 30 日初版発行

訳　者　呉　茂一
装幀者　亀倉雄策
発行者　中島隆之
印刷者　澤村嘉一
印　刷　凸版印刷株式会社
発行所　株式会社　河出書房新社

東京都千代田区神田小川町 3 の 6
電話　東京（292）3711（大代表）・振替口座　東京　10802

定価 750 円

製　　本・加藤製本株式会社
製　　函・加藤製函印刷株式会社
本文用紙・三菱製紙株式会社
表　　紙・日本クロス工業株式会社

目　次

ホメーロス

イーリアス……3
オデュッセイア……323
訳　注……573
関係系図……584
参考地図……585
解　説……587

巻頭口絵　ホメーロス像

レンブラント（1606～1669年）筆

本文カラーさし絵

アングル　ギリシアの壺絵　ポンペイの壁画

モロー　プリマテッキオ

装　幀　亀倉雄策

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

イーリアス

主要人物

アカイア（ギリシア）方

アガメムノーン　ミュケーナイ城主。全ギリシア軍の総帥。アトレウス家の当主。

メネラーオス　アガメムノーンの弟。スパルテーの王で、ヘレネーの前夫。

アキレウス　テッサリア・プティーエーの領主でアカイア軍第一の勇士。彼とアガメムノーンの抗争が本詩の主題をなす。

パトロクレース（略してパトロクレース、また愛称パトロクロス）　父メノイティオスの代からアキレウスの家に寄寓、いっしょに育ち親友また介添役をつとめる。

アイアース　大、小の両人あり、大アイアースはサラミースの領主テラモーンの子。大柄で豪傑肌の、アキレウスに次ぐ強剛の勇士、アキレウスの従兄弟に当たる。小アイアースはロクリスの小領主でオイーレウスの子、小柄だが足が速い。

オデュッセウス　イタケー島の領主。『オデュッセイア』の主人公。

ネストール　半島西海岸の都ピュロスの領主、三代にわたる老将として尊敬される。海神ポセイドーンの子ネーレウスの息子。

ディオメーデース　アルゴス出の青年武将。父テューデウスはアルゴス王アドラーストスの婿で、テーバイ攻撃七将の一人として聞こえる。ギリシア陣の花形の一人。

トロイア方

老王プリアモス　イーリオスの城主でゼウスの子というダルダノスの裔。父はラーオメドーン。五十人の息子と五十人の娘をもつといわれる。

ヘカベー　その正妻でプリュギア王デュマースの娘（異伝もある）。

ヘクトール　プリアモスの嫡長子で、トロイア方第一の勇将。「きらめく兜」とか「武士を殺す」とかよばれる。

アンドロマケー　ヘクトールの妻。間に幼児アステュアナクスがある。ミューシアのテーバイの領主エーエティオーンの娘。

パリス　ヘクトールの弟で、ヘレネーを誘拐し、戦因をつくった「パリスの審判」の張本人。

サルペードーンとグラウコス　ともに小アジア、リュキエーの領主で従兄弟の間柄。シーシュポスの孫の英雄ベレーロポーン（ベレーロポンテースとも）の裔。サルペードーンはゼウスの胤とされ、ともにトロイア方の花形。

アイネイアース　トロイア方の勇将でトロイア王家の分派に属する。父アンキーセースがイーダ山中で女神アプロディーテーの愛をうけ、もうけたといわれる。後に亡国の難をのがれ、イタリアに赴き、ローマ建国の祖になったと伝える（ウェルギリウス『アエネーイス』の主人公）。

ヘレネー　もとメネラーオスの妻。今はトロイアでパリスと結ばれ、微妙な立場にある。父はゼウスとされ、母レーダーが白鳥の姿のゼウスを愛して生んだ卵から出たという。アガメムノーンの妻クリュタイメーストレーの姉妹で双子神とも同胞である。

主要な神々については『オデュッセイア』の主要人物表参照。

凡例

本訳文中に〔　〕で示した個所は、学者によってテクストの純正でないと判断された部分、または異読の部分を表わす。また（　）の部分は、訳者が通読理解の便に供して付加したものである。

第一巻

疫病と憤怒の次第

アカイオイ（アカイア勢、ギリシア遠征軍のこと、アルゴス勢、ダナオスの裔などとも呼ばれる）のトロイア遠征十年目の出来事、本詩の主題であるアキレウスの憤怒の原因を説く。イーリオスの城が陥らないので攻めあぐんだアカイア勢は近隣を劫掠、クリューセーの町からそこの神官の娘クリューセーイスを捕えて来る。戦利品分配の末、彼女は総将ミュケーナイ王アガメムノーンの有に帰する。ところが彼女の父はこれを悲しみギリシア方の陣を訪ね、釈放を求めるが、王は乱暴に彼を追い帰す。神官は悲憤して社神アポローンに祈り報復を求めるのに、銀弓神は悪疫をギリシア陣に送り、兵士らはつぎつぎと倒れてその屍を焼く煙が九日もつづく。十日目にこれを憂えたギリシア方一の勇士アキレウスが、諸将を集会させる。予言者カルカースの解明で原因を知った彼はみなと共に少女の返還を王にもとめる。不満な王は代償にアキレウスが獲た少女ブリーセーイスを奪い取った。彼は憤って自陣にこもり出陣を拒否し、母なる海の女神テティスを呼んで、主神ゼウスに王への報復を乞わせる。ゼウスもついに承諾しギリシア方を敗走させ、王に思い知らせることを約束する。

憤り（の一部始終）を歌ってくれ、詩の女神[1]よ、ペーレウスの子アキレウスの呪[2]わしいその憤りこそ数知れぬ苦しみをアカイア勢に与え、またたくさんな雄々しい勇士らの魂を冥府へと送ってやったものである。そして彼らの屍はといえば、野犬だの、猛禽類の餌食にされた。いっぽうその間に（大神）ゼウス[3]の意図は成就されていったのだ、いかにもそれは、最初に武士たちの王であるアトレウスの子[4]（アガメムノーン）と、勇ましいアキレウスとがけんか別れをして以来のことである。

だがいったい、神々のうちのどのかたが、この二人を向かいあわせて闘わせたのか。レートーとゼウスとの御子[5]（アポローン）である。そのゆえは、彼が王にたいして立腹され、（アカイア軍の）陣中にひどい悪疫を起こしたので、兵士らはどんどん斃れていった、そのもとは、アトレウスの子（アガメムノーン王）が、（アポローンの）神官であるクリューセースを侮辱したからである。すなわちはじめに彼がアカイア軍の速い船（の引き上げて置いてある陣地）へ来た、それはおびただしい償金を持って、（アカイア軍に捕えられてる）自分の娘を買い戻したいという考えで。手には遠矢を射る御神アポローンの神聖なしるしの毛総を上につけた黄金の杖をたずさえ、並みいるアカイア軍の大将たちみなみなに懇願した、中にもとりわけ、兵士らの統領であるアトレウス家の二人の王に向かってである。（それで、いうようには、）

「アトレウス家のかたがた、またその他の、立派な脛当てをつけたアカイア勢の殿がたよ、願わくはあなたがたに、オリュンポス山上に宮居をかまえたもう神々が、プリアモス[7]の城市を攻め取ることをお許しのよう、そして無事に故郷へと帰り着かせてくださるように。だが、私の娘は、どうか私に返して、代りにこの償金を受け取ってください。ゼウスの御子なる、遠矢を射たもうアポローンの神威を畏れて」（神官が）こういうと、他のアカイア軍の将たちは、みな声をそろえて賛成をし、彼に敬意を表してきらきらしい償金を受け取れとすすめたが、アトレウスの子アガメムノーンだけは、これにたいそう機嫌をそこね、神官に侮辱を加えて追い返し、暴言を吐いていうよう、

「このうえおまえに、この私が、うつろに刳った船[8]のかたわらで、出会わんようにするがいい、現在ぐずぐずしていたり、あとでまたやって来たりしてな。そしたらもう、御神の笏杖とて、総とても、身の

護りにはなるまいから。ともかくあの娘を私は返してはやらんぞ、すっかり彼女が年をとらないうちはな、私らが居城に、故郷からは遠いアルゴスの地にいて、機を動かし織りつづけ、また私の寝床の世話をして日を送りながら。だから、さあ、帰れ、私を怒らせるな、なるべく無事に帰りたいなら」

こういうと、老人はこわくなって、王の言葉に従いはしたが、それから、ごうごうと鳴りとどろく海の渚へ、黙りこくって歩いてゆくと、人気のないところへいって、その老人は、アポローン神へと、心をこめて祈りつづけた、髪の美しいレートーが生んだ神へ、である。

「私の祈りをお聞きください、銀弓の神よ、クリューセーの町一帯をお護りのうえ、神聖なキルラやテネドス[1]を稜威も高くお治めになるスミンテウス[2]（アポローン）よ、かつて私が御神へと、神殿の屋根を葺いてさしあげ、また本当に、肥えた牡牛や山羊の腿の供物を、焼いてまつったことがあるなら、この願いをかなえてくださいませ、ダナオイ勢[3]が、御神の矢（の威勢）によって私の涙のつぐのいをいたしますよう」

こう祈りながらいった、その言葉を、ポイボス[4]・アポローンが聞かれると、オリュンポスの峰々から降りて来られた、心にはげしい怒りをもやして。両肩には弓と、しっかりと蔽いをつけた箙とをかけまわしておいでたもので、神様が体を揺すって歩みを運ぶと、ひどく怒っておいでの肩のまわりでたくさんな箭が、ひびきを立てた。御神はさながら夜のように歩を進めておいでだった。それからして、船陣から離れたところに御座を占めると、矢を引き放たれる、銀づくりの弓からは、恐ろしい轟音が湧き起こった。まず最初には騾馬や、足の速い犬どもを、矢は襲った。それから今度は兵士ら自身へと、さきの鋭い矢弾を御神はつぎつぎに放っておあてなされば、（疫癘の矢に斃れた兵士の）屍を焼く火は引きもきらずに燃えつづけた。

九日のあいだ、このように御神の箭は、陣中をくまなく襲いつづけた、その十日目に、会議の場へと、武士たちをアキレウスが呼び集めた。というのは、彼の心に、（そういう考えを）白い腕の女神ヘーレー[5]が、起こさせたからである。つまり女神はダナオイ勢がどんどんと斃れてゆくのを見て、気づかわれたのであった。さて人々が集まって来て、一つところに寄り合ったとき、皆の間に足の速いアキレウスが立ち上がって、こういいかけた。

「アトレウス家の王よ、今はもうわれわれとても、撃退されてしまってからは、故国へ引き返して戻るほかないと思う、もしわれわれが死を万一にも免れたにしろ。まったく戦いと悪疫とがいっしょになって、アカイア軍を負かそうとかかるならば。ともかく、さあ、誰か占い者か、神主か、あるいは夢占いをする者なりにたずねてみようよ、夢というのは、ゼウス大神のもとから遣わされるものなのだから。そしたら彼がどうしてこんなにポイボス・アポローンが激怒されたかいってくれよう、もしやわれわれの祈りについてか、または大贄につき苦情をお持ちなのか。それで、あるいは仔羊や申し分なく育った（犠牲）の山羊の脂身を焼いた煙を受けたもうて、悪疫をわが軍から追い払ってくださるつもりはお持ちでないかを」

こうアキレウスはいい終えて腰をおろした、すると皆の間にテストールの子、カルカース[6]が立ち上がった、鳥占師のうちでもとくに第一人者といわれる者で、現在のこと、未来のこと、また以前にあったことにもよく通じていて、アカイア軍の船隊を自分の占い術によってイーリオスの奥まで導いて来た。その占いの術はポイボス・アポローンが授けたもうたものだった。その人がいま、みなみなのためを思って、会議の座に立ち、説いていうには、

「おお、アキレウスよ、ゼウスに親愛されているあなたが、遠矢を射たもうアポローンのみことがお腹立ちのゆえを語れと命じられるのだから、私はいおうと思う、だが、あなたはよく気をつけて、誓ってください、本当に心をこめて言葉と腕と、両方で、私を防ぎ護ってくれようと。それというのも、これから私はある人物を怒らすことになるか、と思うからだ、その男とは、アルゴス人ことごとくを、大層な威

勢で従え、アカイア軍も服従している人物である。ところで、国の領主というものが、位の低い人間に腹を立てた場合には、いっそうきびしいのが常なのだ。それでその当日は憤りを強いておさえて過ごそうとても、それをはらしてしまうまでは、ずっと後までも恨みを自分の胸に含んでいるのだ。それゆえ、あなたが無事に護ってくれるよう、思案してください」

これに答えて、足の速いアキレウスがいうようには、

「安心してどんどんと、何でも知っているかぎりの、神のお告げをみないうがいい。けして、ゼウスがおいつくしみの、アポローンにかけて、そのかたに、カルカースよ、いつもきみが祈りをささげて、ダナオイ勢に神託を明かし伝えるのだから、けして私が生きている限り、この眼の黒いあいだは、うつろに刳った船のかたわらで、ダナオイ勢全体の誰一人にも、きみにたいして暴力はふるわせまい、よしたとえアガメムノーンというとてもだ、その人はいま、アカイア軍じゅう、断然人にこえて大きな威権を誇るものではあるが」

すると、その時はじめて、元気を出して、この立派な予言者は口を開いた。

「いや、べつに、御神は祈りのこととか、または大贄につき、とやかく苦情をお持ちなのではない、あの神官のためにである。その人にアガメムノーンが恥辱を与え、娘を返してやりもせず、身の代を受け取ってもやらなかった。そのために遠矢を射る御神は、苦難をわれらに与えたのだし、またこれからも与えられよう。それでなおまだ、あのきらきらした眼の乙女を愛しい父（神官）に返してやらぬそのうちは、見苦しいあの悪疫を取り除いてはくださるまい、それも無償で身の代金も受け取らずに（返してやって、御神には）、聖い百牛の大贄をクリューセーへと持ってかなければ。そしたら、はじめて、われわれも、神意をなだめることができよう」

いかさま、彼はこういい終えると、腰を下ろした。すると皆に向かってアトレウス家の殿が立ち上がった、広大な国を治めるアガメムノーンだが、不快の面に、胸中ことごとくはげしい怒りでいっぱいにまっ黒とさせ、両眼は燃え輝く火をさながら、まず第一にカルカースへ向け、禍々しい眼でにらみつけいうようには、

「おまえは、悪いお告げばかりを知らせる。これまでかつてうれしいことは、何一ついってくれたためしがない。いつだっても、おまえは悪い占いばかりをして喜んでいて、善いお告げなどかつて一度もいっても、しても、くれたことがない。今度だとてもおまえは、ダナオイ勢にご神託を伝えるのだとて、遠矢を射る御神がわが軍に苦難をお与えなさるのは、まったく私が乙女のクリューセーイス[1]を抑留して、立派な身の代のものを受け取ることを承知してやらなかった、そのためだという、それは私がぜひとも娘を手もとに置きたいと思っているからだが。本当に私としては、定まる妻[2]のクリュタイメーストレーよりも好きなくらいなのを。彼女に比べて背丈でも手足の姿でも、また気だてといい手の技といい、ひけをとるところはないのだ。だが、それほどながらも、帰してやることにしよう、そのほうがよい、というなら。私としては、つわものどもが死ぬことよりは、無事であるのを望むからだが。それならば私のために、すぐさまにも、（代りの）褒美のものを用意してもらいたい、私だけが、アルゴス勢のうちでひとり、何も褒美をもらっていないのでは正当といえないから。私のもらった褒美がよそへ、いってしまうのは、皆々もいまよくごらんのとおりなのだ」

それに答えて、今度は足の速い、勇士アキレウスがいうには、

「アトレウスの子よ、あなたは皆以上に地位も高いが、また物欲もいちばんに深い人だ。どうしてあなたに、心のひろいアカイア勢が、褒美を（見つけて）さしあげられよう。もうまったく、どこにも皆で共有の財がどっさり置いてあるとも聞かない。方々の町から分捕って来た品物はみな、もう分配してしまったのだから、兵士たちからそれをまた返させて、元へ集めよせるのは面白くない。ともかくあなたは、いまその娘を神様にお返しなさるがいい、そしたら今度はアカイア勢

が、三倍にも四倍にも、その償いをすることだろう、もしも将来ゼウス大神が、トロイアの、立派な囲壁をもつ城市を攻めおとさせてくださろうなら」

これに答えて、アガメムノーン王がいうようには、

「神にもたぐえられるアキレウスよ、いかにもきみは勇士だろうが、けしてそんなふうに、だまそうと思ってはならぬ、とうてい私をいいくるめも説きつけもできなかろうから。いかさまきみは、自分は褒美をもらっているのに、私は何ももらわずに、おとなしくして坐っていさせようというんだな、それで私に娘を返してやれと命じるのか。それなら褒美を、心の大きいアカイア人らが、十分前のと引き合うくらいにくれるならよし、もしまた十分よこさん場合は、私が自身で取り立ててやるぞ。きみの分け前なり、アイアース[1]のなり、またオデュッセウス[2]の分け前なりをとって来てやる。私にやって来られた男は、さぞ腹を立てることだろうがな。だが、まあそのことは、いずれまた後でゆっくり考えるとして、いまはさあ、(娘を送り返しに)黒い船を、かがやく海へとひき下ろさせよう。その中へは漕ぎ手たちをほどよくそろえ、百牛の大贄も載せてやろう。それからは頬の美しい乙女、クリューセーイスその人を乗り組ませるのだ。それにはまた誰か一人、相談役の大将が、指揮官として乗ってってくれ。アイアースなり、イードメネウス[3]なり、または貴いオデュッセウスなり、それともきみなりがだな、ペーレウスの子の、すべての武士たちの中でも、いちばん恐ろしい人間だが、われわれのため祭を執りおこなって、遠矢の御神をなだめまいらすよう」

すると、王を上目づかいににらみながら、足の速いアキレウスが向かっていうよう、

「なんだと、厚顔無恥なうえ、狡猾にも儲けばかりをねらうのだな、そんなきみのいうことに、どうして進んで、アカイア軍の一人でもが従うものか、遠いところを出かけろとか、敵の武士と奮戦しろと頼んだにしろ。私だとても、けしてトロイア方の槍をあつかう武士たちのせいで、ここへ戦さをしようと来たのではない、格別私が彼らを恨むかどはないから。これまでけして私の牛の群れだとか馬だとかを、彼らがさらっていったことも、また土塊の沃かに、武士たちを育てあげるプティーエー[4]の郷で、実った畑を荒らしつくしたこともないのだ、その間には鬱蒼として大層もない山脈だの、とどろきわたる大海だのがあるのだから。そうではなくて、ただあなたといっしょに従ってきたものなのだ、恥も知らないあなたを、喜ばせようとばかりに、メネラーオス[5]と、犬(みたいに恥知らずな)顔をしたあなたのため、トロイア人に償わせようと骨折るつもりで。それらのことを、いっさいあなたは顧みもせず、気にもかけないで、今度もまた自分から来て私の褒美を奪い取ろうと脅しつけるとは。それを獲るのに、私も大変苦労をしたし、それで私にアカイア人の息子たちがくれたものなのに。

第一これまで、あなたと同等な報償をもらった覚えがない、いつだってもアカイア勢が、トロイア方の、景勝の地に位した城市を攻めおとした場合に。しかも激しい合戦のおおかたは、私の腕がやりとげるのだが、いよいよ(獲物の)分配となると、あなたがもらう分け前のほうがずっと大きく、私はわずかをだいじにかかえて、船陣へと帰っていくのだ、戦いつづけて、くたびれたあげくに。だが、今度という今度、私はプティーエーに帰っていくぞ、舳のまがり上がった[6]船を率いて故郷に帰ったほうが、ずっとましだから。もうこのところに侮辱を受けながら、あなたのために富や財を積みあげてやるつもりはもたない」

それに答えて今度は、武士たちの君アガメムノーンがいうようには、

「どんどん勝手に逃げていけ、きみの心が急き立てるなら。私としても、自分のために、とどまってくれと頼みはしない。私にはまだ他の人たちがついている、大切にもしてくれようというかたがたがな、第一、知謀の御主ゼウス神がだ。きみこそ、ゼウスが護り育てたもう国国の領主のうちでも、いちばんに憎たらしい男だぞ。きみときたらし

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

じゅう争いだとか、戦争だとか、合戦だとかを好いてる。いかにもきみは剛勇だろうが、それはまず御神の賜物といわねばならない。故郷へ船なり手下の勢なり引き連れてって、ミュルミドーン[1]らを治めるがいい。きみのことなど私はてんで気にもかけない。恨んでいようと平気の平左だ。ただこれだけは、ぜひとも実行するぞ、ポイボス・アポローンがクリューセーイスを私のとこから奪ったように、――その娘はこれから私が自分の船で、私の仲間に送らせようが、――私としても、自分でこれから陣屋へいって、きみが褒美として受けたブリーセーイスを、連れて来てやる。それは、どれほど私のほうがきみより力が強いものか、よくよくきみにもわかるようにだ。そうなれば他の大将とても、私と同じにえらぶったり、面と向かって肩を並べたりすることをはばかろうから」

こういうと、ペーレウスの子（アキレウス）は、憤ろしさにのどもふさがり、粗毛の生えた胸の奥の心臓は二つにわれて、あれこれと思い惑った、鋭い剣を腰のわきから引き抜いて、大将たちを立ち上がらせ、アガメムノーンを斬り殺そうか、それとも憤怒をおしとどめ、いきり立つ胸をおさえたものかと。ちょうどこのようなことを、胸の奥、心の中でとやこうと思いはかっていたとき、そして大きな刀を鞘から抜こうとしかけたおりしも、アテーネー[2]（女神）が大空から降りて来られた。つまり白い腕の女神ヘーレーがお遣わしになったのである、二人ともを御心にかけ、いとしく思っておいでたもので。ペーレウスの子のうしろに来て立ち、亜麻色の髪をひっつかまえた。（その姿は）アキレウスだけには見えたが、他の誰にも見えなかったのだ。アキレウスはびっくりたまげて、うしろを振り返り、すぐとそれがパラス・アテーネーだと悟った、女神の両眼は恐ろしく輝いていたので。そこで（アキレウスは）女神に声をかけ、翼をもった言葉をいいあげた。

「どうしてまた、やってこられたのです、アイギス[5]をお持ちのゼウスの御娘が、アトレウスの子アガメムノーンの非道の振舞いをごらんになろうとおっしゃってか。それなら、あなたにいっておきましょう。またこのことはかならず成就されようと思うのですが、彼はまもなく、自分の傲った心ばえゆえ、いつかそのうち命をなくすことでしょうよ」

それに向かって、今度はまたきらめく眼をした女神アテーネーがいうには、

「私はおまえの立腹を止めようとして天からやって来たのだ、もし（私の言葉を）きいてくれるならね。私をおよこしなさったのは、白い腕の女神ヘーレーで、両方ともを御心にかけ、気づかわれてのことなのだから、さあ争いは中止して、剣を手に引き抜くのもやめにしなさい。それよりも口先だけで非難してやるがいい、どうあろうとてもね。それというのも、こうはっきりといっておこう、またこのことはかならず実行されようからね。それでいつかは、おまえも、いまこうむったひどい仕打ちのつぐないとして、この三倍ほども立派な輝く財宝をもらえるだろう。それゆえいまは胸をおさえて、私たちのいうことをきいたがいい」

そこで女神に向かって、足の速いアキレウスが答えていうよう、

「それはもとより、お両神さまのおおせは守らねばなりません、女神よ、よしたとえ、どんなに胸が憤りのため煮え返ろうとも。そのほうが良いことなのですから。神々の命を素直に聞くものならば、神々もまたその人の願いを容れてくださるといいます」

こういって、銀づくりの柄のところに、重々しい手をひかえとめた。それで鞘へと大きな剣を押し戻したのは、アテーネーの命に素直に従ったのである。女神はそのまま、オリュンポスをさしておいでになり、アイギスを保つゼウスの宮へ、他の神々の間へと帰還された。

一方、ペーレウスの子（アキレウス）は、それからまたもや、容赦ない言葉でアガメムノーンをののしりつづけ、いっこう怒りをおさえようとしなかった。

「あなたは、酒びたしで重たくなった、顔といったら（恥知らずな）

犬のよう、心臓は鹿みたい（に臆病）な男だ、まだ一度だっても戦さへと、兵士たちといっしょに鎧をつけて出かけることも、またアカイア勢の大将たちと、待ち伏せに行くことも、思い切ってできないとは。あなたには、それが命にかかわるように見えるからなのだ。いかさま、アカイア軍の広い陣営にすっこんでいて、自分に楯を突くような人間から、もらった褒美を取り上げるのは、それよりずっとたやすいことだな。国民を食いものにする領主だ、ものの数にもならぬやつらを家来にしているからだろうが、アガメムノーンよ、人に侮辱を与えるのも、これがもう最後だぞ。

ともかくはっきりいっておこう、また重い誓いにかけて誓おう、いや、この杖にかけて、これはもはや、葉も枝も生やせまい、まったく一度、山間で木の切り株を離れて来てから、もうはや芽を出し繁りはできなかろう。ぐるっとまわりの木の皮や葉を、青銅（の斧）が剝ぎ取ってしまったからは。それを今度はまたアカイア人の息子らが、裁きをするとき、てのひらに持つならわしになっている、ゼウスの御前で、掟を護るつとめの者がだ。それゆえ、（この杖にかけて誓った）この誓いは、重大なものといえよう。きっといつかは、アカイア人の息子たちが一人残らず、アキレウスがいてくれたら、と考える時が来よう。どんなにあなたが胸を苦しめようとも、何も護りになるものを見つけることはできないだろう、武士を殺すヘクトール[1]の手にかかって、大勢の者が命を落し、どんどん倒れていくおりには。それであなたは、心中、腹を立てながら後悔するにちがいない、アカイア軍中第一の勇士をちっとも大切にしなかったことを」

こうアキレウスはいうと、杖を地面に投げつけた。黄金の鋲をいくつも打ちつけた杖である。そして自身は腰を下ろした。いっぽう、アガメムノーンもこちら側では、依然として腹立ちつづけていた。すると、二人の間に弁舌の巧いネストール[2]が、勢いよく立ち上がった。声量ゆたかな演説家として、ピュロス勢のかしらである。その人の舌端からは、蜜よりもっと甘くやさしい文句が流れて出る（といわれた）。また彼は、言葉を用いる人間のはや二世代を見送って、いま三代目の人々を支配しているところだった、つまりきわめて神聖なピュロスの郷で、以前に彼といっしょに大きくなった人々とそれから生まれた人人との二世代を見送ったのだ。そのネストールがいま一同のためをおもんぱかって、会議の席に立ち、みなに向かっていうよう、

「やれやれ、何たることか、大変嘆かわしいことが、アカイア人の国にたいしておこったものだ。まったく（敵方トロイアの王）プリアモスやプリアモスの息子たちが喜ぶだろうな。また他のトロイア人たちも、心で大喜びをすることだろうよ、あなたがた二人がこういがみあっている次第をそっくり聞き伝えたなら。ダナオイ勢の中でも、はかりごとにかけても、戦さにかけても、超えすぐれている二人がだ。まあ（私の言葉に）従いなさい、あなたがたは、二人とも私よりは年も若いのだから。というのも、以前に私は、あなたがたよりさえも、超えすぐれていた勇士たちと交わりを結んでいたが、彼らはけっして私を軽んじなどしなかった。いや、まったくあんな侍たちは見たことがない。またこれからとて見はすまいよ。ペイリトオス[3]とかドリュアースとかいう、兵士たちの統率者、それにカイネウスやエクサディオスや、神にも比すべきポリュペーモスや、さらにはアイゲウスの子テーセウス[4]など、この男は不死の神々にもたぐえられる人物だった。

その人たちは、この地上に住む人間のうち、とりわけて剛勇無双の者として生い立って、剛勇ならびがなく、また剛勇無双の者どもと戦さをしていた、山間にすまうケンタウロス[5]たちとであるが、その者どもを手ひどく討ち破ったのだ。しかもこの人々と私は、ピュロスから、遠いアビアの郷から来て、親しく交わりをつづけたものだった。彼らがみずから呼び寄せたのでな。しかも私は、自分ひとりで闘っていった。だが、彼らとは、とうてい現在この地上にいる人間の、誰一人として、闘い合えようとは思えない。それなのに、彼らは私の立てるはかりごとに耳をかし、私の言葉に聞き従ってくれたものだ。

それゆえ、あなたがたもまあ、いうことをききなさい、きくほうが

得なのだから。まあ、あなた（アガメムノーン）のほうも、よし権威が優れてはいようと、こなた（アキレウス）から乙女を奪いとろうとなさるな。アカイア人の息子たちが、はじめにこなたへ褒美にくれた、そのままにしときなさい。またあなたも、ペーレウスの子よ、国の主と対抗して争おうなど思ってはならない。それというのも、王笏をもつ国の王は、ゼウスが誉れをお授けになったもの、けして他人のおよぶべくもない尊敬を天から頒ち与えられている。それゆえ、たとえあなたが剛勇のつわもので、生みの母は女神だといっても、こなたのほうが位は上なのだ、もっと多くの人々の支配者なのだから。またアトレウスの子よ、あなたのほうは、その立腹をおさえるがいい、そしたら私が、アキレウスにも怒りを捨てるように頼もう、なにしろ彼はすべてのアカイア人らにとっても、わざわいな戦さから護ってくれる大きな櫓なのだから」

これに向かって、アガメムノーン王が答えていうには、

「いかにもまったく、老人よ、あなたがいわれたことはみな、筋のよくとおったことだ。だが、この男は、他の人々をみなしのごうと思っている、誰彼をもみな自分に従わせ、誰彼をもみな支配しようと、すべての者に号令しようと考えてるが、そんなことは、とうてい私はきくわけにはゆくまいだろうさ。たとえば彼を、常住にいたもう神々が、ひとかどの武士となされたといって、それだからとて、すぐ、勝手なことをいってもよいとなさったわけではあるまい」

すると、それをさえぎるように、勇ましいアキレウスは言葉を返して、

「いかさま、臆病者とも、ろくでなしとも、私は呼ばれていいことだろう、もし万事につけて、あなたがいうどんなことにも譲歩しつづけていくとしたら。いや、そんなことは他の者にいいつけたがいい、私はともかく指図を受けないから。もうこのうえは私はけして、あなたなどには従うつもりはいっさいないのだ。もう一ついっておく、よくそれを胸におさめて覚えていろ、腕力では、けして私はあの乙女のために闘うことはしないだろう、あなたとも、他の人とも。それは私にくれた者が、また取っていくのだから。だが、黒塗りの速い船のかたわらに（ある陣屋に）私が持っているすべてのもの、そのいっさいの一つだとて、私の承諾なしに取って持ってくことは許さないぞ。いや、ほんとうに、ちょっとでもやってみろ、すぐ皆にもわからせてやる、すぐさま血が黒々と、槍のまわりにはしろうということを」

かように二人は対抗して、はげしい言葉で争いながら、座を立ちあがり、アカイア勢の船陣のかたわらで開いた会議を解散した。ペーレウスの子は陣屋のほうへ、釣合いの取れた船へと、メノイティオスの子（パトロクレース）[1]や、その他、仲間の人々を連れ、出かけていった。一方、アトレウスの子はといえば、速い船を海へと引き下ろさせ、中へと二十人の漕ぎ手を選りすぐって、百牛の大贄を御神のため載せこんでから、美しい頬をしたクリューセーイスを連れて来て坐らせた。また統率者には、知恵に富んだオデュッセウスが乗っていった。

それから、一行は、船へ乗って渺々たる潮路を航らせていった。一方、アトレウスの子は、兵士たちに、潔斎をして汚れをすすぎ浄めろと命令した。そこでみなみな汚れをすすいで、海へとけがれを投げ入れてから、アポローン神へと、申し分なく立派な、牡牛だの山羊だのの大贄を、荒涼として荒れはてた海の渚のほとりでたてまつった。その脂身の焼ける匂いは天へと、ぐるぐる煙の輪を描いて上がっていった。

このように人々は陣屋をあげて働いていた、その間もアガメムノーンは、さっき初めにアキレウスを脅していった争いをやめようとせず、タルテュビオスとエウリュバテースの二人に命じていった、この二人は彼の伝令使でまた忠実な従者だったものである。

「ペーレウスの子アキレウスの陣屋へいってこい。手を取って、美しい頬をしたブリーセーイスを連れてくるのだ。万一にも渡さなければ、私が自身で大勢の者を率いて出かけ、奪ってこよう。そしたらい

っそ、あいつは、ひどい目を見ることだろうが」
こういって（二人を）遣わした、きびしい言葉を命じたものである。そこで二人は、しぶしぶながらも荒涼として荒れはてた海の渚を進んでいって（アキレウスの部下）ミュルミドーン族がいる陣屋や船のある場所へやって来た。そして彼が陣屋のわきの、黒い船のかたわらに坐っているところに出会ったが、もとより二人を見てうれしい顔は見せなかった。一方、二人のほうでも、ちぢみあがって、国の主（アキレウス）を畏れ敬って立ちすくみ、何も彼に向かって物をいえず、たずねることもできずにいた。しかしアキレウスは胸のうちでよく事の次第を悟り知って、二人に向かって声をかけた。
「よく来た、伝令のかたがた、（あなたがたは）ゼウスのお使い、また人間界の知らせを伝える者なのだ。もっと近くに寄りなさい、けして何もあなたがたに悪いところはない、アガメムノーンだ、彼があなたがた二人を、乙女ブリーセーイスのため、よこしたのだから。では、さあ、ゼウスの裔であるパトロクレースよ、乙女を連れ出して来て、このかたがたに連れていくよう渡してあげろ。だが、あなたがた二人も、自身で証人になってくれ、祝福された神々の御前でも、やがて死ぬ人間たちにたいしても、また非道な国王にたいしても。いつかまたきっと、他の人々をあさましい破滅から防ぎ護るために、私の助けが、ぜひとも入用になった場合に備えて。まったく王は、呪われた心でもっていきりたち、前後の思慮もすっかりなくしてしまっているのだ、どうしたら船陣のかたわらでもってアカイア勢が安全に戦えようか、ということも」
こう彼がいうと、パトロクロスは親愛する友の言葉にすぐさま従い、陣屋から美しい頬をしたブリーセーイスを連れ出して来て、連れていくよう二人に渡した。二人はまた、アカイア軍の船陣へと向かって帰れば、女も、進まぬながらも、伝令使たちといっしょに出かけた。一方、アキレウスは、（抑えていた）涙を流すと、すぐ仲間からひとり離れて引き退き、灰色をした海の渚に坐りこんで、涯しのない海原のうえをながめいった。そして両手をさし伸べて、いとしい母（なる海の女神テティス）に向かい、しきりに祈った。
「母上、あなたが私を、ほんのわずかの間だけ生きているようお産みでしたからには、ともかくも名誉だけは十分私に、オリュンポスにおいでの、高い天に雷をとどろかすゼウス御神も与えてくださるはずでした。ところがいま、大神はまるでちっともだいじにしてはくれなかったのです。まったく私を、アトレウスの子の、広い国を治めるアガメムノーンは侮辱したのですから。だって、彼は自分のほうから、私のもらった褒美を奪って、取ってったのです」
こう涙を流していうと、その声を深い海の底で、父である（海の）老神（ネーレウス）[1]のわきに坐っていた母の女神が聞きとめた。そこですぐさま、またたくひまに灰色の海から、霧のように立ちのぼって出た。そして、アキレウスその人の前に坐った、まだ涙を流している息子の前に坐ると、手で撫でさすってその名を呼び、言葉をかけた。
「私の子よ、何を泣いているの、どういう嘆きがおまえの胸に来たというのかえ、いっておしまい、心にかくしておいてはいけない、私もおまえも、二人ともよくわかるように」
すると母神に向かって、ひどく嘆息しながら、足の速いアキレウスがいうようには、
「わかっているくせに、どうして、それをみなすっかり知ってる母上にお話しすることがありましょう。私たち（アカイア勢）は、エーエティオーン[2]の聖い居城のテーベーへと押しかけてゆき、城を攻め落してから、獲物はそっくりここへ運んで来ました。それを、アカイア人の息子たちは、自分らの間でもって、しかるべく分配しまして、アトレウスの子（アガメムノーン）へは、美しい頬をしたクリューセーイスを選び出して与えたところが、（その父親で）遠矢を射たもうアポローンの神官をつとめるクリューセースが、青銅の帷子を着たアカイア勢の速い船（が引き上げてある）ところへ来て、娘を贖いたいというので、たくさんな身の代を持って来ました。手には遠矢を射る御

神、アポローンの神聖なしるしの毛総を上につけた黄金の杖をたずさえ、並みいるアカイア軍の大将たちみなに懇願しました。とりわけ兵士らの統領であるアトレウス家の二人の王に向かってです。

そのおり、他のアカイア軍の大将たちは、みな声をそろえて賛成し、神官に敬意を表して、きらきらしい償い代を受け取るようすめましたが、アトレウスの子アガメムノーンだけは、これにたいそう機嫌を悪くし、神官に侮辱を加えて追い返しました。老人は腹を立てたまま帰っていった、その祈ることをアポローン神がお聞き入れになりました、もともと大変ひいきにしていたからです。そこでアルゴス勢に向かって御神は禍いの矢をどんどんと放たれたので、兵士たちはつぎからつぎへと死んでいきました。御神の死の矢は、アカイア軍の広い陣営中にくまなくおとずれたのです。それでわれわれのため、事由をよく心得た占い師が、遠矢の御神の神託を説きあかした。

すぐと私は先に立って神意をなだめまつるようにとすすめたところが、アトレウスの子（アガメムノーン）が腹を立てて、いきなり立ち上がると、私を脅かしつけていいました、そのことがいま、実際に遂行されたわけなのです。その娘（クリューセーイス）はいかにも、速い船に載せて、眼のきらきらしたアカイア人らがクリューセーへと送っていき、御神へも献げ物を持ってきました。またいましがた、伝令たちが（やって来て、私の）陣屋からあの娘、アカイア人の息子たちが私にくれた、あの乙女ブリーセーイスを、連れていったのです。それゆえ、もし母上がおできならば、自分の息子をかばってください。オリュンポスへいって、ゼウスに頼んでみるのです。もし本当にあなたが、言葉なり所行なりで、ゼウスの心を以前に喜ばせておいたというならば。だってたびたび（まだあなたが）父上の館においでだった時分に、得意になっておっしゃるのを聞いたものです。あの黒雲（を寄せる）クロノスの御子（ゼウス）のために、不死である神々のうちあなたが、ただ一人だけ、ひどい辱しめを防いであげた、という話を。それはゼウスを、ほかのオリュンポスにおいでの神々が縛りあげようとなさったおりのことでした、ヘーレーやポセイドーンや、またパラス・アテーネーなどがです。

それをあなたは、女神の身として、出かけていって、ゼウスの縛しめをこっそりほどいてさしあげ、すぐさま百腕の怪物を高いオリュンポスへと呼んできました。（その者を）神様がたはブリアレオーンと、人間どもはみなアイガイオーンと名づける怪物で、腕力では、自分の父（ウーラノス）よりまたもっと強いという、それがクロノスの子（ゼウス大神）のわきに意気揚々と侍っているので、祝福された神々もおじけをふるって、それ以上はもう縛るのもあきらめたという。そのおりのことをゼウスにいま、思い出させ、そばに坐ってお膝にすがり、なんとかしてトロイエー方の加勢をする気にならせ、アカイア勢を船の舳や海のほとりへ押しこめてから、どんどん殪されていくようおはからいを願ってください。誰もかもあの王様の有難味を味わうように、またアトレウスの子の、広大な国を治めるアガメムノーンも、自分のひどい思いちがいを悟るようにです、アカイア軍中いちばんの勇士をすこしも重んじなかったことを」

すると、テティスは彼に向かって、涙をさめざめと流しながら答えていうよう、

「まあかわいそうな私の子よ、どうしてまあおまえを育てあげてきたのか、かなしい運命におまえを産みつけながら。できることなら、おまえが船陣のかたわらに、涙も知らず悩みも受けずに坐っていられたらうれしいものを。おまえの寿命はほんの束の間の、けして長くはもたないとわかっているのだから。それがいまでは、誰よりかも短命なうえに、また痛ましい目にあおうとは。いかにも不運な身の上に（父上の）館の中で産みつけたものです。ではこの次第を、雷鳴をとどろかすゼウスに話しに、これから自身で、深い雪をいただくオリュンポス山へ出かけましょう、承知してくれるか、ひとつやってみに。

だがおまえは、進みの速い船陣のかたわらに坐り込んだまま、アカイア勢を恨みつづけ、腹を立ててはいても、戦さには全然手を出さない

でひかえていなさい。それというのも、ゼウスさまは、ちょうど昨日、オーケアノスへ、立派なアイティオプス[1]たちのところへお出かけなさって、神さまがたもみな、それについておいでした。それでこれから十二日目にオリュンポスへ渡っておいでになろう。そしたらその時、おまえのために、青銅を敷いたゼウスさまのお館へ私が出かけていって、お膝にすがって願ってみましょう、きっと説きつけられるだろうよ」

こういい終えると、女神は去ってしまわれた。アキレウスは、そのままそこに取り残されて、人々が無理矢理に、彼の承知もまたないで奪っていった、美しい帯をしめた女のことで、なお胸中に腹立ちつづけていた。一方、オデュッセウスは、聖い大贄を船に載せてクリューセーに到着した。それで一行は、いよいよ深く水をためた入江の中へはいっていくと、帆をまず下ろして、黒塗りの船の中へ収めて置き、それから柱の前の張り綱を引いて帆柱を受け木にたぐりよせるのも、すぐさまにし、船を泊り場へと、櫂を使って漕ぎ進めた。それから重しの石をいくつも投げこみ、ともづなを固くゆわえつけてから、今度はみなみな乗組員自身が、海の波打ち際へと降り立って、遠矢を射るアポローン神への大贄の牛を降ろせば、クリューセーイスも大海を渡ってゆく船から外へ降り立った。それから彼女を祭壇のところへ連れていって、知恵に富んでるオデュッセウスは父神官の手に渡し、彼に向かっていうようには、

「おお、クリューセースよ、私を差し遣わしたのは武士たちの君主アガメムノーンだ。娘をあなたのところへ連れてゆき、またポイボス・アポローンに聖い大贄をダナオイ勢のために執りおこなって、神意をなだめまいらせようとてである、いましもアルゴス勢へと、嘆きに満ちた禍いをつかわされたので」

こういって手渡してやれば、神官も喜んでいとしい娘を受け取った。それから人々は、すぐさま御神へと聖い大贄の牛どもを、立派につくり上げた祭壇のまわりに順序よく並べ立たせ、それから手をすすいだうえ定式の割麦を手に取り上げると、みなみなのためクリューセースは両手を差し上げ、大きな声で祈っていうよう、

「お聞きください、銀弓の御神、クリューセーの町に護りをめぐらせ、神聖なキルラやテネドスを稜威も高くお治めになる御神よ、いかさままことに、これまで前に私の祈りをお聞き入れのうえ、私をだいじにしてくださって、アカイア方の兵士たちに大損害をお与えなさいました。そのように、今度もまた何とぞ、私の願いをかなえてくださいませ。いまはもうはやダナオイ方から、このむごたらしい疫病をお払いのけになってください」

こう祈りながらいうと、その願いをポイボス・アポローンはお聞きになった。さて人々は祈願を終わり、定式どおりに割麦を振りかけてから、まずまっ先に犠牲の牛の頭をひき上げ、のどを切り裂き皮を剝いでから、両腿の骨を切って取ると、これへ脂身を二重にかさねて蔽いかぶせ、その上へ生ま肉の片を並べておいた。それを今度は年老いた神官（クリューセース）が割った薪にのせて焼き、それへきらきら輝くぶどう酒をそそぎかけた。その人のわきに若者たちが、五叉になった鉄串をささげて立った。

やがて腿肉がよく焼けあがり、みなみなして臓物を味わってから、他の部分をこまかに切り刻んで串のまわりに刺しとおし、念入りにあぶりあげたうえ、全部を火から取りおろした。このようにして仕事が終わり馳走の支度がすっかりできあがると、食事にかかった。申し分ない饗宴には、何一つ望んでたりぬところはなかった。それから今度はもう十分に、飲み物にも食べ物にも満ちたりると、若者たちは混酒器になみなみと酒を注ぎみたし杯を取り[2]、まず神へと注ぎまいらせてから、順ぐりに皆の者へ注いでまわった。こうして一日じゅうアカイア人の若者たちは、アポローンへの頌歌を美しく歌いつづけ、神意をなだめまいらせようと、遠矢の御神をたたえまつれば、御神もそれをきこしめして心を慰められた。

さて太陽が沈んで暗闇が襲ってきたとき、まさしくそのとき人々は

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com